

令和4年 3月 31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 静岡県浜松市中区下池川町34番3号  
管理機関名 学校法人 信愛学園  
代表者名 服部 泰啓

年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年 4月 1日(契約締結日)～ 令和4年 3月 31日

2 指定校名・類型

学校名 浜松学芸高等学校  
学校長名 内藤 純一  
類型 地域魅力化型(C1910)

3 研究開発名

「地域創造コース」による地域の活性化に挑む学校

4 研究開発概要

本構想においては初年度を「地域創造コース」の立ち上げのためのカリキュラム開発期間と、2年目をカリキュラムの実践と高校2年次から実施するクエストエデュケーションに向けて「対象の研究→フィールド調査→課題設定→検証・試作→プレゼンテーション→フィードバック」の学びのプロセスを身につける期間と位置づけ、実践研究に取り組んできました。

最終年度である本年度は、地域創造コースの生徒が高校2年生となり、学校設定科目として設定した「地域創造概論」・「地域創造演習」を、地域で学ぶための3年間の体系的なカリキュラムの中でどのように位置づけていくか検証しました。また、学校設定科目のため、教科としての評価について令和3年度から小プロジェクト毎に観点別評価を試験的に導入しました。この評価について、1年間を通じた体系的なカリキュラムの中での整合性について検証を行いました。さらに、現在、県外へ波及した本校のプロジェクトについては、本年度も他県の高校と協働して実践・検証に取り組みました。最終的にこれらを統合し、地域での学びの実践や評価が本校だけのものではなく、様々な地域でも活用することができる教科・教材としての共通化を目指しました。

また、地域創造コースに先行して取り組んできた探究活動でのクエストエデュケーションを、地域創造コース 2 年生において科目として実施しました。さまざまに広がる生徒の問題意識と解決へのアイデアを地域の方々とどう共有していくか、外部コンソーシアムメンバーを核とした地域との連携体制の確立に取り組みました。

浜松学芸高校では、地域の魅力発信に衣食住の身近な観点から取り組み、既存の学力観だけでないアイデアを形にする力を Art ととらえています。そうした視点からの実践を通して、今後も本校の地域魅力化の取り組みを地域へ還元するとともに、他地域へと波及させていきます。

#### 5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

#### 6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
山本 仁	静岡大学教育学部・特任教授	学校教育専門家
岸川 政之	皇學館大学 現代日本社会学部・教授 内閣府 地域活性化伝道師	学識経験者
内藤純一	浜松学芸高等学校・校長	学校責任者

#### 7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
学校法人 信愛学園 理事長	服部 泰啓
株式会社サツ川製作所	薩川 敏
遠州ビジネス交流会	水野 久美子
地域事業コンサルタント	池田 克信
株式会社 白井商事	白井 成治
永田木材 株式会社	永田 琢也
ヤタローグループ	渡部 尚樹
浜松学芸高校 校長	内藤 純一
浜松学芸高校 副校長	原田 豊治
浜松学芸高校 教頭	福田 耐子
浜松学芸高校 普通科長	藤井 茂
プロジェクトリーダー（教諭）	大木島 詳弘

#### 8 カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	岸川 政之	皇學館大学	委託
海外交流アドバイザー	小川 良徳	浜松学芸高校	非常勤
地域協働学習支援員			

## 9 管理機関の取組・支援実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
成果報告								●				●
他校連携								●	●			
高大連携	●	●	●	●			●	●		●	●	

### (2) 実績の説明

本校の実践の特徴は、実行プロジェクト数の多さです。これは、地域での学びに重点を置く「地域創造コース」の新設やプロジェクトベースの課題解決型学習に対して地域のニーズが一致したことで実現しました。またコンソーシアムのメンバーが地域の異業種団体を核としており、地域企業との連携が容易であった点もプロジェクトの実行スピードが上がった要因です。管理機関としてプロジェクトやカリキュラムの実行について日々情報を共有することはもちろんですが、本年度の管理機関は実践の拡散を目的に成果報告・他校連携・高大連携の3点について大きな役割を果たしました。実践を自校内だけにとどめず、他校や地域外への拡散のために「地域に開いた学校」として位置づける役割を果たしました。

#### <成果報告>

本年度も感染症の拡大に伴い外部への3月の成果報告の実施は難しい状況でした。特に本年度より開始したクエストエデュケーションは、企業と連携した実践の成果を地域に還元する欠かすことができない場として成果報告を位置づけていました。幸い地域との協働とともにICT化を推進していたため、youtubeLIVEでの配信が可能になり、協働した県外の中学・高校や大学の先生方、そして保護者の方々など多くの方々と成果を共有することができました。

また11月に実施した本校オープンスクールにおいて、地域創造コースの活動紹介や体験の場を成果報告として設置したことも有効でした。プロジェクト型学習は生徒の主体的な活動や仲間との協働が必須となります。こうした活動やカリキュラムの特性を事前に体験することで、入学後の不一致を減らすことを目指すと同時に、学区内で地域との協働の認知度が上がることで、想定した生徒数を超える人数が集まり、熱量の高い実践を行う下地となりました。

#### <他校連携>

昨年度までの取り組みが認知され、多くの学校から視察の依頼をいただきました。本校では特に授業の公開日を設けることなく、通常授業日でも視察や訪問を受け入れる体制をとりました。実践の授業の参観や実際の生徒との交流を通して、プロジェクト型学習の教育的効果や実施プロジェクトの教材としての可能性を確認していただきました。その結果、これまでポスタープロジェクトを協働してきた青森県立鱒ヶ沢高校や三重県立白山高校に加え、神奈川県三浦学苑高校とも協働プロジェクトを実行することができました。さらに、地元の白須賀中学校では、本校で実施している地域おにぎり開発プロジェクトを教材として導入することにつながり、実施指導・助言に携わることができました。

< 高大連携 >

本年度は、より専門的な見地から大学の先生方からも視察の依頼をいただきました。東京女子大学や嵯峨美術大学から来校いただき、次年度以降の高大連携に向けて可能性や実施内容の共有を行うことができました。さらに昨年度から協働に向けて準備をしていた静岡文化芸術大学との協働プロジェクトを実現させ、地域での学びを高大でシームレスに繋げる検証の場を設けることができました。感染症の影響で予定していた内容の全ては実施できませんでしたが、双方の立場からの活動を振り返る成果報告を行い、地元紙に取り上げていただきました。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①学校紹介ポスター・動画作成	●	●	●									
②注染浴衣配色プロジェクト (白井商事株式会社)			●	●	●	●						
③県立森林公園CM・動画制作 (静岡県立森林公園)						●	●	●				
④地域おにぎり開発プロジェクト (ヤタローグループ)								●	●	●		
⑤天竜木材活用プロジェクト (永田木材)										●	●	●
⑥オリジナル染色プロジェクト (東京女子大学 BPC)		●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
⑦摘果ミカンプロジェクト (エシカル甲子園)			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
⑧CM 動画班 (禁煙動画コンテスト)	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
⑨ポスター制作班 (BUNRI クリエイティブアワード)	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
⑩観光班 (観光甲子園・高校生 CM コンテスト)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
⑪高大連携プロジェクト (静岡文化芸術大学)	●	●	●	●		●				●		
⑫浴衣イベントの実施			●	●				●	●			
⑬ポスタープロジェクトの実証 (三浦学苑)							●	●	●			
⑭プロジェクト型修学旅行の検証				●	●	●	●	●				
⑮学年横断的プロジェクトの検証	●	●	●									
⑯御前崎ワーケーションプロモーション (JTB・御前崎)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
⑰第6回 SBP 交流フェア		●	●	●	●							

## (2) 実績の説明

本年度は、プロジェクト型学習教材のフォーマット確立、年間を通じたクエストエデュケーションの検証、外部への成果報告、他校との連携、の大きく4つの内容について取り組みました。昨年度までに研究・立案したカリキュラムに基づいた実行のフェーズに移行することで、実際に運用する際の問題点の克服や、より効果を高めるためのブラッシュアップに取り組みました。

### <プロジェクト型学習教材のフォーマット確立>

実施内容①～⑤は、高校1年生の小プロジェクトとして衣食住の観点から実行しています。昨年度から始まった地域創造コースのカリキュラムとして実践し、本年度は実践の拡散のための検証と実践のブラッシュアップに取り組みました。学校設定科目として実践している5つのプロジェクトは、系統性を重視して企画されています。初期のプロジェクトから徐々に活動範囲を広域に、またプロジェクトゴールを具体的な試作からアイデア提案へと抽象化させていきます。仲間と協働して企画を行う実行力や意見・考えを論理的に構成する力のゴールイメージを、発達段階に応じて変えていきました。

1年生の5つのプロジェクトのうち、ポスター制作プロジェクトは他校でも実践できる教材として検証が進んでいました。残りの4つのプロジェクトについても担当教員を配置し実践の共有化に取り組むとともに、各プロジェクトの教材化に向けて検証しました。本年度はCM・動画制作について青森県立鱒ヶ沢高校と協働で実践検証を行う予定でしたが、感染症の影響で中止となってしまいました。地域おにぎり制作プロジェクトは近隣の白須賀中学校でも実践して教育的効果を検証し、森林公園プロジェクトと林業プロジェクトについては来年度から他コースでも実施することが決まりました。まだ検証が行えていないプロジェクトもありますが、どのプロジェクトも実施授業時間が25時間程度と、他校でも総合的な学習や探究の時間で無理なく実践できることが確認できました。

### <年間を通じたクエストエデュケーションの検証>

高校2年生を対象としたクエストエデュケーションは、本年度が実施初年度となりました。クエストエデュケーションとして取り組んだ⑥～⑩の各プロジェクトは、実際に企業と協働して生徒達のアイデアを形にし、その効果を検証する段階まで取り組みました。生徒達のアイデアを実践するにあたり、協働していただく企業と生徒のマッチングには学外のコンソーシアムメンバーが大きな力となりました。実際にCM制作紹介の場を頂いたり、試作協力企業を紹介いただいたりと、生徒達がアイデアを実行するための重要な存在となりました。本校のコンソーシアムは民間企業や団体を中心に構成されていることが、多くのプロジェクトの実行数と実行速度が向上する大きな要因であったと分析しています。

またクエストエデュケーションをどのように評価するかについては大きな課題でした。①～⑤のプロジェクトは実施後にそれぞれ評価を行ってきましたが、クエストエデュケーションではコース内での中間報告・年度末の成果報告に加え、外部コンテストへの応募を加え、3つの評価点を設けました。外部コンテストを活用することで、生徒達が取り組む課題に対して教員以外の客観的評価を導入することができるとともに、生徒自身が取り組む課題やアプローチの効果を可視化したりアウトプットしたりする機会となりました。その結果、観光甲子園2021では準グランプリを、福山大学主催の高校生CMコンテストにおいては動画部門とポスター部門でグランプリを獲得することができました。

さらに地域の企業と一歩踏み込んだ協働をすることで、クエストエデュケーションの成果を地域に還元することができました。具体的には、染色プロジェクトで制作した生地を用いたシャツの市販化、摘果ミカンを加工したジャムの店舗納入、地元企業のCM制作、浜松市役所ポスター制作といった成果を残すことができました。

#### <外部への成果報告>

本年度は、1～2年生のプロジェクトの実践が揃ったため、積極的に外部への成果報告を行いました。感染症拡大の中、外部からの視察や大規模な報告会を実施することはできませんでしたが、本校はでが ICT の活用についても実践を進めていた関係上、大きなホールや体育館でもネットワークを用いた活動や報告が可能になりました。年度末の成果報告では、複数画面を組み合わせて youtubeLIVE で配信できる環境を整え、多くの方に視聴していただくことができました。生徒の取り組みが充実したことによる発表内容の深化、プレゼンテーションや動画の制作など発信スキルの向上、学校としての ICT 環境の充実により、成果報告を充実させることができました。今後も、取り組みを校内で完結させるのではなく、地域への還元や他校に向けた実践共有の場として広く発信する活動に取り組みたいと考えています。

#### <他校との連携>

本校の大きな研究テーマには、自校で実施しているプロジェクトの教材フォーマット化があります。本年度は3校との協働を予定していましたが、感染症拡大にともない⑬の神奈川県三浦学苑高校との実施にとどまりました。特にこれまで2校で実施してきたポスタープロジェクトを協働で実施し、教材としての検証を行いました。これまでの実践を踏まえて、実施手順や方法の標準化に取り組みました。探究的な学びについて実践方法を模索する学校が多く、教材を導入する際の時間的制約や方法の問題に対して、本校のポスタープロジェクトの教材は有効であると感じました。その理由は、実践の方法が確立できていることに加えて、実践内容がコンパクトであり制作する枚数により時間のコントロールが可能である点、何より自分たちの地域の再発見に繋がり地域の方々にも受け入れられるという点でした。この地域のポスター制作プロジェクト型学習は、JTB の教育コンテンツとして公開されています。研究終了後も、本校生徒がインフルエンサーとなって様々な地域で実践の拡散に取り組みたいと考えています。

#### <高大連携>

本年度、大きな挑戦として静岡文化芸術大学との協働プロジェクトを実施しました。静岡文化芸術大学の池上教授の指導のもと、大学生には単位を認定する地域連携演習として「天竜浜名湖鉄道沿線の魅力発進活動」に大学生11名と本校生徒10名で取り組みました。沿線のフィールドワークを通じて魅力発進の動画とポスターの制作が進んでいましたが、感染症拡大によって活動は中断してしまいました。1月には大学生・高校生が双方の立場から活動を振り返り、観光の意味や地域の魅力について再考察した成果報告を行いました。高校生にとっては、論理的な思考の形成やプレゼンの構築は大きな刺激になり、大学進学に向けてのキャリア形成としても大きな効果があったと感じました。

#### <地域との協働の発展（企業との協働の発展）>

本校で行ってきたこれまでの地域の魅力発信活動が認められ、⑭や⑯のように企業からの依頼が入るケースが増えてきました。本年度は JTB から協働の打診をいただき、御前崎市でのワ

ワーケーションのプロモーションについて活動を行いました。これまではポスターや CM 動画の制作を依頼されるだけでしたが、このプロジェクトではワーケーションのプロモーション企画そのものを提案することができました。地理条件的に不利な御前崎でのワーケーションを親子の絆を取り戻す時間と捉える企画書を作成し、御前崎市と JTB に提案しました。その結果、提案した企画コンセプトを採用いただき、ポスターとプロモーション動画の制作を担当することができました。制作した動画は来年度から正式に公開されます。この御前崎市と JTB との取り組みは、JTB の教育コンテンツとして Web 上で全国に公開されています。

また、浴衣パフォーマンスの実施についても、地域の遊園地やイベントだけでなく、大型ショッピングモールでの単独イベントの依頼など、確実に地域での認知は広まってきました。こうした地域企業からの依頼が増加したことは、クエストエデュケーションで養った企画力とアウトプットの力が、実際に地域に還元されている証明であると考えています。

#### <修学旅行のプロジェクト化>

地域創造コースとして⑭の「地域で学ぶ修学旅行」をどう構築するかという課題に取り組みました。従来の修学旅行は、どこに行くか・何を見るかという「地域を学ぶ」視点が大きかったと感じていました。様々なプロジェクトを通じて「地域で学ぶ」ことを目指してた本校では、修学旅行でも訪れた地域でどのような地域の魅力発信が行われているかのフィールド調査を大きな目的とし、修学旅行期間中に生徒達が自由に気づいた点を調査レポートとしてまとめることにしました。提出されたレポートは、食や観光の視点だけでなく土の色に気づいた生徒が農業と食の関わりについて考察したり、アーケードによる集客効果に注目したりするなど多様な視点から地域を考察することができました。プロジェクト型の修学旅行については、今後も継続的な課題として研究を進める必要があると感じました。

### 1 1 目標の進捗状況, 成果, 評価

#### <アウトカム>

本年度から始まった 2 年生のクエストエデュケーションは、地域での系統的な学びの成果を検証する場として最重要と捉えていました。クエストエデュケーションは、1 年生の 5 つのプロジェクトを通じて身につけた、課題に対する実行力と多面的な考察力を発揮する場でした。実際に始まってみると、多くのチームで行き詰まりが見られました。これはこれまでのプロジェクトが短時間でゴールイメージが描きやすかったのに対して、クエストエデュケーションではゴールイメージも生徒達自身で描かなくてはならないことの難しさからであったと分析しています。活動の途中で実行していたプロジェクト自体が中止になってしまい方向転換を余儀なくされたり、協働企業の都合で変更になってしまったりと、民間企業との協働では起こりうる事でした。多くの失敗や困難の中でも、外部コンテストへの参加をゴールイメージとして捉えると、活動自体は進展するようになりました。年度末の成果報告では生徒達がそれぞれの役割を担い、お互いの成果報告の共有を熱心に行っていました。クエストエデュケーションの活動を通じて、1 年生のプロジェクト型学習以上に達成感や己肯定感が高まっているのを感じました。

こうした取り組みを通じで多面的な地域の見方や多様な価値観が形成されるとともに、地域に対しても肯定的な捉え方ができるようになったと強く感じました。その結果、進学希望においても他の普通科生徒よりも県内の大学や地域政策系学部への進学希望の割合が高くなりました。活動の中では、多様な価値観や個性を重視してきました。プロジェクトを実行する中で、自分には何ができるのか、そしてどう地域と関わることができるのか、生徒達がそれぞれ自ら

を見つめる機会となるキャリア形成の場となっていました。

#### <アウトプット>

本校のこれまでの実践の多くは、一人のマンパワーに頼った実践であったと言えます。そのため、本年度はプロジェクトの実行者を育成して実行に移すことが大きな目標でした。1年生の5つのプロジェクトについては5名のスタッフがそれぞれ担当し、実践の検証を行うことができました。プロジェクトを校内に完全公開していたため、多くの教員が活動に興味をもち、生徒達への助言や実践への質問などを共有する機会を設けることができました。それにより多面的な地域の見方や多様な価値観を共有するという大きな目標を達成するだけでなく、様々な教科の観点で実践を行うESDの視点を盛り込むことができたと感じています。

管理機関による外部への発信と学外のコンソーシアムメンバーによる地域企業との連携構築は、特に大きな成果に結びつきました。本校でのプロジェクトは、試作をして終わりではなくその事によってどのような変化が起こったり問題を解決したりすることができたか、という点を重視してきました。そのため、協働する企業も単なる技術提供にとどまらず、プロジェクトの成果が実際に商品化されたり地域に還元されたりする機会創出に繋がりました。これは、年度末の大きな成果報告だけでなく、管理機関によって様々な場で成果を報告する機会を設けていただけたことが大きな要因でした。SNSはもちろん、こまめな情報発信が地域での認知を高め、協働の機会創出に繋がったと感じています。

また、評価についても、外部コンテストを活用することで成果報告と活動評価を同時に行う事ができるという大きなメリットに気づくことができました。アイデアだけに終わらない、商品開発をゴールにしないことで、生徒自身の活動が地域にどのような効果や問題解決に繋がるか、それを検証することをゴールとして取り組んで来ました。その結果、外部コンテストでも大きな評価をいただき、観光甲子園2021SDGs修学旅行部門では2位となる準グランプリ、高校生CMコンテストではポスター部門・動画部門の両部門で1位となるグランプリ、東京女子大学ビジネスプランニングコンテストではアイデア部門で最優秀となる東京女子大学賞を受賞した他、いくつかのコンテストで入賞に繋がりました。さらに、3月に行われたベネッセSTEAMフェスタでは、全国125チームの中の代表として、全国に向けてプレゼンテーションを行いました。1年生から系統的に地域で学んできた知識やアイデア構築だけでなく、アイデアの実践結果や新たな企画の構築、アイデアを発信するスキルも向上したことが確認できました。昨年度に続き、2年連続で本校の想定した定員を上回る生徒が集まり、地域におけるこうした学びのニーズの高さを実感しました。

研究指定の期間を通じて、「地域企業と協働する→外部へ発信する→企業からの依頼が増加する」というサイクルが回ることでこれまで以上に地域との協働が進み、地域に開かれた学校、そして地域に必要とされる学校として認知されてきたと感じています。

#### <添付資料> 目標設定シート

##### 1.2 次年度以降の課題及び改善点

本年度は1年生のプロジェクト型学習に加え、2年生のクエストエデュケーションが始まり、大きな成果を残すことができました。地域での学びとプロジェクト型学習の相性は良いことが分かったものの、いくつかの課題や改善点も分かってきました。



### ①教員の負担軽減

1年生のプロジェクト型学習では、実施する5つのプロジェクトを5名の教員で分担することで実践の共有と教員の負担を減らすことができました。しかし、2年生のクエストエデュケーションでは生徒がそれぞれ興味の近い者同士でグループを構成したため、6つのチームが同時並行に異なるプロジェクトを実施していました。教材としてフォーマット化を進めていた1年生のプロジェクト型学習に比べて、2年生のクエストエデュケーションは自由度が高く、その分教師の指導分野や範囲も広く深くなりました。外部コンテストへの応募や年度末の成果報告に向けての資料やプレゼンテーションの制作は担当する教員の専門教科の枠を超えており、こうした分野への教師のスキル向上や担当教科との負担調整が今後の課題となります。学校設定科目で「地域創造」を設け、教科としてどう運用していくか、教材としての共有化はもちろんですが、評価・スキルの研修や標準化が改善点として残りました。

### ②教材化に向けた検証

本校で実施している1~2年生の各プロジェクトは、自校でしか実施することができないプロジェクトとならないように注意してきました。地域の魅力発進ポスタープロジェクトは、これまで青森県や三重県・神奈川県で実践検証を行い、地域を学ぶ教材としてのフォーマット化の達成と有効性を確認できました。さらに、おにぎりプロジェクトや動画のプロジェクトについても、他校での実践の検証段階に入ることができました。ポスタープロジェクトの実践検証が3年かけて取り組んできたように、他のプロジェクトは十分に検証が行えているとは言えません。他校との協働実践を増やし、教材化するための検証に取り組むことが課題となります。また教材化したプロジェクトをどう全国に共有化していくか、その仕組み作りも今後の課題であると考えています。

### ③進路実現に向けた追跡調査

本年度で地域創造コース1期生は2年生を修了しました。1年生のプロジェクト型学習を踏まえて2年生のクエストエデュケーションに取り組み、地域での学びに系統的に取り組むことができました。しかし研究指定期間で卒業生を送り出してはいないため、進路の追跡調査をしていくことが今後の課題となります。科目として実践するために先行実施していた部活動の「社会科学部地域調査班」では、所属する3年生は7名のうち半数以上の4名が地域や政策に関わる学部へ進学することが決まりました。4名の生徒は活動の実績をもとに総合選抜型や学校推薦入試に挑戦し、学部学科は異なるものの全て合格に結びつきました。この指導のノウハウを活かし、地域創造コースの1期生45名の進路実現をどう指導していくか、次年度以降の大きな課題であると考えています。

#### 【担当者】

担当課	普通科地域創造コース	TEL	053-471-5336
氏名	大木島 詳弘	FAX	053-475-2395
職名	教諭	e-mail	gakugei.s36@gmail.com